

2. びろ水におし流されていた

中川村中川西中学校二年

K・S

二十八日の朝、五時五十分ごろのことです。ざあざあ雨の音、ごうごう天竜川の音に、私ほうとうとしめていた。

「おーい、早く早く。」
 と母のさけび声。何事かどび起きた瞬間に、どかんと大きな物が背にかぶさつて来た。もうその時は身体一っばいびろ水にっかり、なにがなんだかわからない。びろして外に出られたのか、腰まごつかつて、びろ水におし流されていた。弟も頭からすっかりびろ水にっかり流されていた。やっとおとうさん、お母さん達に引き出されました。頭はがんがんとしているし、なんだか身体がぶるぶるとふるえている。そのうちに大勢近所の人達がかけてくれました。深い水、すぼすぼ落ち込む畑の中を夢中ぞ、隣のおじさん達のゆう導で、高い田の土手まで、ひとまずかけ上がった。どしておばさんの家までびろんこのまま行きました。家につくとあがりはなの上にしばらく横になりました。びろの衣類をぬぎ、弟はふろに入り、私は身体をふいて、おばさんの着物をかりて着がえした。おぼろしさとかなしさで、やたらに涙が出てくる。一瞬にしてあの惨状。学用品も楽しみに集めた人形やこけしも全部びろ水にうまっまっしたのだ。着がえをおわって一安心したものの気持がおちつかず、家はびろなっましまつたのが、馬豚、山羊、にわとり、種々の家畜も皆生きまいるだらうか。どう思うと一もくさんに家に向かって走った。となりのおばさんの家までくると、お

かあさんはおぼさんの着物をかり、横になつていた。足にはほうたいをしいた。私も少しはすりきずをしたが、大けがはしなかつた。となりで朝飯をいただいたが、むねが「っはいでおいしくはなかつた。母と私と家まで来てみると近所の人連が大勢集まつた。」

「えらいことになつてしまつた。レ」

と口々に話しながらどろにつかつた家財道具を整理したり、つぶされた家のどろりこわしやらで大さわぎだつた。崩れた山は赤はだかになり、まだぐたぐたとどろ水をおし出しつゝいる。私はまだ大きく崩れて来るのではないかと心配でなりました。おじおじしながら、山の方ばかり見ていると近所のおじさん達が、「Kちゃ、おっかながつたら。山はあれだけくんでしまつたから、もう大きくはくんでごんに。レ」といつくられたので少しは安心ができました。

おがあさんと「となりの家までダンスに入つていた衣服などを運んだ。どんどんかたづけまくれる。おじさん達からどろんこの教科書をもらつて、私は一生懸命に洗いました。おとうさんに、

「本は洗つてもだめだ。レ」

と言われましたが、する気にはなれず、物置のすみに片よせておきました。お勝手場や台所はすっかりどろ水につかり、大きな石が床の上のころがまつていゝ。そのうちに消防団の人達が、ポンプを持って来て戸や床上をざあざあど洗つてくれました。庭にはどろ水の中に、なべ、かま、おはち、種々なものが「っはいおし流されていゝ。朝ごはん前だつたので、おかまにごはんが「っはい

つまったままびろの中にういている。びろの上を親猫が、まだ小さかった小猫をあっちに行ったり、こっちにきたりして、一生懸命さがしている。私はおどろしく、何も手がつけられない。どうしたらよいのだろう。今夜はどこへおるのか。頭の中はどんなことばかりでがんがんとする。どの晩は危険だからといつて、家中、本家にひなんして泊めてもらうことになった。夕飯も少しも食べられなかつた。ローソクのあかりのまわりに大勢あつまつて、今朝のおどろしかつたことを話しながら、

「災難にあつても皆命びろいのできてよかつた。し

とおとうさん達は話していた。外は又はげしい雨の音、ごうごうという水の音で床に入つてもねむれなかつた。はやく夜が明けまくればよいが、とあんなに夜の長く感じた時はありませんでした。

どしま今でも、ごうごうという音がすれば、ヘリコプターの音も、自動車の音も、皆、山崩れの音のような気がしてなりません。

(三十六年)